

エスノグラフィー^{レトリック}生産技術の解剖

P. Atkinson, *The Ethnographic Imagination: Textual Constructions of Reality* (Routledge, 1990)

野 崎 賢 也

1. はじめに

民族誌＝エスノグラフィー的手法は、現在、様々な分野で用いられている。人類学・民族学はもちろんのこととして、社会学においても、シカゴ学派に代表されるように、民族誌的手法は重要な位置を占めてきた。さらには、解釈学の大きな影響や、現象学・エスノメソドロジーといった刺激により、様々な形で、民族誌＝エスノグラフィーが数多く産み出された。例えば、「民族誌は、専門の人類学者が自らの経歴を歩み始め、それなりの評価を確立するための入門式のような行為となっている」[マーカス&フィッシャー、一九八九、p. 56] し、社会学においても、コミュニティ研究や都市社会学などに不可欠の領域であり、重要な位置を占めている。

そして、様々な流派の、数多くの民族誌が産み出されるにつれて、それ自身が抱える幾つかの根本的な問題が認識されるようになってきた。また、「氾濫」によるインフレーションの危険から、民族誌＝エスノグラフィー自身の価値を、守り維持していく必要も出てきた。こうした「自己検証」の必要性の増大により、民族誌＝エスノグラフィーの方法論・認識論等を廻って、かなりの数の議論が産み出されている。(この点に関しては、主に人類学を対象としているが[マーカス&フィッシャー、一九八九]に扱われているので参考にした。) これらの議論によって、民族誌はよりリフレクシブな方向に歩みだしたと言っていいたいだろう。

それゆえ、本書は、これらの議論の延長線上に位置付けられて読まれなければならない。というのは、著者たちが本文の中でも述べているように、そうした議論をふまえないければ、本書の意図するところが誤解を受けかねないからである。つまり、本書は、簡潔に言えば、社会学者(書き手)が行なう、様々な民族誌的テキストのリアリティーの構成・構築の仕方、読者を説得し納得させるために用いられる戦略、を「レトリック」として、批判的に検討したものであるがゆえに、ともすると民族誌は「マジック」を用いて「うそ」の世界を描きだすのだ、と受け取られかねないということである。このような誤解を排除するた

めにも、本書が、民族誌をめぐるリフレクシブな議論を背景に持つことを念頭に置く必要がある。

それらの議論は、人類学の巨人たちを脱神話化するいくつかの仕事によっても刺激されたのだが、ここでは、日本人によって書かれた一つの興味深い事例を挙げることによって、ごく簡単にではあるが、表象することができるだろう。民俗学者である宮本常一の、ある意味で象徴的なエッセイである。「調査地被害」[宮本、一九八六]と題されたそれは、宮本がフィールドにおいて先行調査者の「痕跡」に出会った体験を述べている。「珍しい」風習の残っていた、とある土地では、異なる調査団によって何度も調査された為に、次第に、調査者に受けの良いのものが「答え」として住民によって整えられ用意されるようになり、いわば調査者と被調査者の間のやりとりが過剰にマニュアル化されていた。さらには、期待を抱いて訪問する調査者を失望させぬ為に、「珍しい」答えが創作されたりしていた。また、調査者の側も、自分の理論に適合する、より「珍しい」答えが得られるインフォーマントを恣意的に選び、それによって研究がなされていた。宮本は、こうした様を、「訊問科学」・「略奪調査」の例とともに、自戒を込めて著している。

宮本の民族誌の発展を願う自省的な精神は、民族誌を描こうとするものにとって共通のものであろう。上で述べたように、本書は民族誌的記述の裏を「暴く」ことを目的としたものではなく、まさに、こうした建設的な自省が本書の基盤であるといえよう。さらに、宮本のエッセイが象徴的なのは、民俗的「リアリティー」が構成されていく過程を「レトリック」と捉える本書と共通の視点を暗に示していて、「悪しき」レトリックの有様を実感させてくれるからである。

2. 概 観

ここでは、本書を、章ごとに要約し、その内容を紹介することにしたい。本書では、個々のテキスト批判が具体的に行なわれている。しかしながら、本文中で取り上げられている豊富な事例や引用は、実験的な民族誌をも含んでいて、まさにこれこそが本書の大きな魅力なのだけれども、紙幅上割愛せざるを得ない。

《第一章 Introduction: ethnography as method and genre》

本書は、社会学者によってなされた、主に社会学の分野における民族誌（的手法を用いた研究）をテキストとして批判的に検討する試みである。著者が最初に断っているように、この本は調査方法論の教科書ではない。著者は既に、方法論を他書として公刊している（[Hammersley and Atkinson 1983]）。

本書では、社会科学の著作において、今まであまり省みられることのなかった、文の「書き方」、つまり広い意味での「レトリック」が問題にされている。文章の文学論的な検討から、著作の題や引用にいたるまで、テキストを構成する様々な要素について、テキストがどのようにその内容を表現・表象し、リアリティーを構築・構成し、「もっともらしさ」と信頼性・信憑性・権威性を獲得し、読者を説得・納得させるのかを、豊富な民族誌の事例を用いて、些細に検討したものである。著者が指摘するように、社会科学においても、さらには自然科学でさえも、読者（学生であれ同業者であれ一般の人々であれ）を説得・納得させるために、様々な戦略・因習＝レトリックがふんだんに用いられている。

実際、社会的リアリティーは、完全に独自の秩序を持ったものではなく、それゆえ「書き手」を一切反映しないニュートラルなテキストなど存在し得ないものである。だから、民族誌的テキストも、「書き手」が、ある「レトリック」を用いて社会的／社会学的リアリティーを構成したものだと考えなければならない。こうした「レトリック」を用いて民族誌が描かれているのならば、それを批判的に検討しておくことが当然必要になるのである。この姿勢は、先にも述べた民族誌記述の方法をめぐる議論から必然的に導きだされたものと言える。著者が強調するように、民族誌の未来を明るく力に満ちたものにするには、リフレキシブに自らの方法論を検討する以外に方法はないだろう。

テキストを分析する際、様々な理論や決定的に対立する認識論的立場を用いるが、ここでの目的はそれらの妥当性を判断することではないので、そうした異なる対立する立場・視点を併置する。

取り上げる事例に関して、人類学においては、既に民族誌的手法の検討はある程度なされており、本書で主に扱われるのは社会学の、特にシカゴ学派にはじまる都市における様々な民族誌的テキストである。これらの中には、テキスト上での野心的な試みを行なった幾つかの実験的民族誌も含まれている。

《第二章 Ethnography and the poetics of sociology》

ここでは、社会学のテキストが、いかに「レトリカル」であるかが様々な例を用いて示される。言語によるコミュニケーションの場合と同じく、社会学的テキストは、「書き手」と「読み手」それぞれの文化的コードのストックや学問的因習・伝統に依拠している。それゆえ、テキストを通してのコミュニケーションに、どのような「レトリック」が働いているかを考えることが重要である。例えば、テキストの体裁 format や用いられる枠組み framework や配置・配列 arrangements が、「書き手」・「読み手」双方にとって、重要性を持つことが挙げられている。その他、あらゆるレトリックや文学的手法を、民族誌（テキスト）のなかに見いだすことができる。そして、社会学の中で、民族誌＝エスノグ

ラフィーの領域が、シカゴ学派や「参与観察」の影響を通じて、どのように形成されてきたかを述べる。シカゴ学派や民族誌的記述と、文学における写実主義との一定の平行的な関係も指摘されている。

《第三章 Ethnography and the poetics of authoritative accounts》

この章では、様々なジャンルの「権威ある記述」がどのようにレトリカルであるかが、詳しく述べられている。例えば、「事実に基づく記述」でさえも、そのリアリティーは、書き手がどれだけ「本当らしさ」を付与させることができ、読者がどれだけ「本当らしさ」を見いだすことができるか、にかかっているのである。これは、「科学」においても同様である。科学論文においても、それらは単に「報告」しているのではなく、「説き伏せ」ているのである。そこには、議論のための様々な戦略が用いられており、それゆえレトリカルである。また、レトリックとしての隠喩 metaphor・換喩 metonymy などの機能が分析されている。この2・3章では、社会学やその他の「権威ある記述」を、詩学 poetics と捉えることが強調されている。「何が」いわれたのかが問題なのではなく、「どのように how」いわれたのかが問題にされなければならない、ということである。

《第四章 Ethnography and the representation of reality》

この章では、書き手が民族誌を構築する際の、幾つかの重要な局面について分析がなされている。まず、フィールドで得たデータによって、テキストの構成をしようとする段階である。そこには、数々の選択が働き、また、「書き留めた writing down」フィールドノートが、「(製品として)書き上げられる writing up」ためのデータとして扱われる。次に、文章を書く段階では、文学の手法もレトリックの一つとして用いられる。例として、ヘミングウェイの小説と、ある民族誌的記述の導入部が併置され、比較されて、その類似性が指摘されている。また、タイトルを付けるという段階でも、様々な戦略＝レトリックが働いている。ここでも幾つかの民族誌のタイトルが並べられ、その類型によっての効果などが検討されている。例えば、通常正反対だと考えられている2つの要素を併置し、そのコントラストを際立たせるタイトル戦略などである。

《第五章 Voices in the text: exemplars and the poetics of ethnography》

この章では、テキスト上で繰り広げられる推論、その証拠、そして証明にいたる迄に用いられる幾つかの戦略＝レトリックを検討している。例えば、フィールドにいる「自分」と、民族誌を書こうとしている「自分」との、時制の違いを利用した「対話」の形式。文化的・伝統的な表象の形態が、偶像的、指標的、象徴的な関係の様式の組合せに基づいて

いる場合が多いことを利用するレトリック。類例の使用の仕方や、テキスト内の様々な「声」の使用、特に多声法的な手法など。これらを用いて、どのようにテキストの要素を暗号化し、かつ、社会学者自身のコメントをすべり込ませ、説得力を持たせるか。さらに、様々なタイプの具体的例証と推論的な論評が繰り返し相互作用することによって、民族誌は説得力を獲得するのである。

《第六章 Narrative and the representation of social action》

この章では、テキストの様々な場所にちりばめられる「語り」の要素について考察している。民族誌の書き手が、どのような立場にたち、どのような視線から、どのように物語を「語る」のかを分析している。特に中心的に扱われているのは、個人的な「告白」と、事件の長期的な「記録」という二つの形態である。これらの語りは、組み合わせられ、反復され、かつ、編成されて、民族誌のなかにおけるその効果を増すのである。しかし、語りの「過剰」による弊害も同時に存在していることに注意しなければならない。

《第七章 Character and type: the textual construction of actors》

この章では、テキストの登場人物についての幾つかのタイプが検討されている。「印象深い」登場人物を持つ民族誌や、逆にそれを持たないもの。登場人物に「ヒーロー」のいる民族誌や、目立った特徴を持たない登場人物、あるいは普通の人によって構成された民族誌。例えば、特定の登場人物に密着したライフヒストリーや伝記的な手法と、個人に関する親密な知識を持たない「匿名の」民族誌について。これらの、登場人物の類型が、テキストのなかでどのように機能し効果を持つのか。さらに、テキストが、筋書き中心なのか、登場人物に中心を置いた「心理学的な」ものか。こうした様々な手法が持つ効果は、基本的には読み手の文化的コードに依拠している。

《第八章 Difference, distance, and irony》

ここまでの章では、テキスト上にどのように「差異」・「他者」を表現するかについて考察がなされてきた。この章で問題となるのは、観察者の「自己」である。民族誌を書くとするものは、原則的に常に「マージナルな現地人」でなければならない。そこには、「仲間」になるという望みと、ある距離を維持し「他人」でもあらなければならないという、常に緊迫した状態が存在している。つまり、テキストの権威性・信憑性は、「他人」が当該の文化に親密になることができるという前提に依拠しているが、調査者が対象に親しくなれらなうとするだけ、逆に、彼はそれを「特異」なものとして描く必要があるということである。インサイダーの詳しい知識とアウトサイダーの常識、というコントラス

トが民族誌の権威性・信憑性を構築するのである。ここには、内部／外部のレトリカルな使用がなされている。コントラストやアイロニーや差異を扱うことは、「他者性」をレトリカルに構築することに依拠しているのである。そして、民族誌において、アイロニー等のレトリックの利用が有効性を持つことが示されている。

《第九章 Conclusion: textual possibilities》

この本を通して、「事実に基づく」あるいは「信憑性のある」記述が、如何に「レトリック」に依拠しているか、について考えてきた。これらは、決して民族誌の信用を傷つけるものではない。社会的リアリティーを表現するために日常言語を用いるならば、こうしたレトリックを自覚することが必要なのである。つまり、社会学的民族誌にとって、言語とその意味に、より関心が払われるようになれば、必然的に自らの社会学的言語の使用にも注意が向けられなければならないのである。用いられる言語は、「透明」ではない。社会学者は、今まで、その対象に注ぐ関心に比べて、自分自身に言及することが少なかった。民族誌を書くものには、こうした批判的自己評価は、欠かすことができないであろう。また、民族誌は、様々な実験的試みを大切にすべきである。そうして、民族誌というジャンルの未来は、明るいものになるだろう。

3. 「民族誌的想像力 ethnographic imagination」に関して

上のように、本書を概観し、その主張するところを見てきた。本書が読まれる際に、特に注意されなければならないのは、繰り返し述べたように、これは民族誌の内幕暴露ではない、ということである。逆に、自らを批判的検討する作業を通じて、新たなよりよい民族誌の可能性を高めようとしているのである。認識論上の大きな問題である「otherness」を理解しようとする試みに従事している民族誌学者には、こうした姿勢が常に求められ、また、彼らこそ、この認識論上の問題の解決になんらかの貢献をすることができるのではないだろうか。この点に関して、本書のタイトルが展望を示唆しているように思われる。本文中には、「民族誌的想像力」に関して詳しく述べられていないが、それこそ「想像力」を用いて「民族誌的想像力」を考えるように差し向けている、と「想像」できるのである。

厚東洋輔は、社会学的想像力の諸類型としての、人類学的想像力および民俗学的想像力について考察している〔厚東、一九九一〕。人類学的想像力は「異文化」に向けられたもの、民俗学的想像力は「自己」に向けられたものだとするならば、民族誌的想像力は両者とは異なるものであることが明らかになる。つまり、民族誌的想像力は、「他者性」を追

求するものだ、と言えるだろう。今後、民族誌的想像力をめぐって、なんらかの生産的議論が行なわれることを期待したい。

本書以降に出された、民族誌に関しての社会学的著作として、*What's wrong with ETHNOGRAPHY?* [Hammersley, 1992] があり、フォローしておく必要があるだろう。また、本書は、検討する対象を、研究者によって生産された「テキスト」に限定しているので、「研究者自身」に対する幅広い知識社会学的問題に関しては、P・ブルデューの仕事（例えば [ブルデュー、シャンボルドン、パスロン、一九九四] 等である）などを参考にしなければならないだろう。

引用・参考文献

- G・E・マーカス & M・M・J・フィッシャー『文化批判としての人類学』一九八九年 永渕康之訳 紀国屋書店
- [Marcus, G. and Fischer, M. (1986) *Anthropology as Cultural Critique*. Chicago: University of Chicago Press.]
- 宮本常一「調査地被害」『宮本常一著作集 31』一九八六年 未来社
- Hammersley, M. and Atkinson, P. (1983) *Ethnography: Principles in Practice*. London: Tavistock
- Hammersley, M. (1992) *What's wrong with ETHNOGRAPHY?* London: Routledge.
- 厚東洋輔『社会認識と想像力』一九九一年 ハーベスト社
- P・ブルデュー、J=C・シャンボルトン、J=C・パスロン『社会学者のメチエ』一九九四年 田原音和・水島和則訳 藤原書店
- [Bourdieu, P., Chamboredon, J-C. and Passeron, J-C. (1973) *Le métier de sociologue: préalables épistémologiques*. Mouton.]

(のざき けんや・修士課程)